

故 名誉員 工博 真田秀吉先生を想う

昭和 35 年 1 月 20 日真田先生が忽焉として逝去されましたことは詢に痛惜の情に堪えず、ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は明治 6 年 5 月 5 日広島県三原市に生れ、同 31 年東京帝国大学土木工学科を御卒業になり、直ちに内務省第 5 区（大阪）土木監督署に奉職され、当時我国最大の河川工事であつた淀川改修の第 12 区新淀川開削に従務されました。続いて同第 22 区、淀川下流改修淀川工区等の主任を歴任し、明治 44 年 4 月内務省東京土木出張所に転じ、大正 10 年まで利ノ木出張所長に転じ、河川改修工事の外昭和 6 年度より発足した直轄国道工事をも統轄されることになりました。

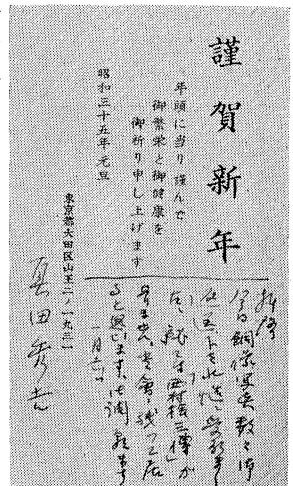


利ノ木出張所長に転じ、河川改修工事の外昭和 6 年度より発足した直轄国道工事をも統轄されることになりました。先生はその著書「内務省直轄土木工事略史、沖野博士伝」中に「余は河川改修の一般を沖野博士に教はり、水流制御は原田博士に教はつた」と書いておられますが、両先生なき後はその遺業を継ぐ大先覚者として直轄工事の機構に努めると共に、施工の基準を確立することに努力されたのであります。現今活発となつた機械化土工に先鞭をつけ、淀、利根両川の改修工事に於て施工された土工量は実に莫大な量に達し、特に利根川第三期改修の土工量は 4 613 万立方メートルを算したのであります。かくの如く先生は土工に於て我国の第一人者であつたばかりでなく、護岸水制についても先進原田博士の教示によつて従来の工法を改善し、急流部、緩流部に夫々適する工法を案出されたのであります。先生はその生涯を通じ、卓越した技術者として我国土の保全開発に献身されたのみならず、又後輩の指導育成にも多大の力を致され、先生の御教示により幾多の優秀なる技術者が輩出し、直轄工事推進の一大原動力となつたことは争はれないところであります。これ又先生の大功績といわねばなりません。尚先生は土木出張所長として公務御多端のかたわら河流制御に関する名著「日本水制工法論」を執筆し、後輩を裨益すること多大なものがあつたが、御退官後も「日本土木史」、「本邦土木と外人」を完成される等全生涯を通じて発表された著作および論文は多数に上りました。先生は終始一貫その生涯を建設事業の基盤確立に尽瘁すると共に永年の経験と豊富なる蓄積を傾けて土木工学の進歩発達に努力されたものであります。特に「内務省直轄土木工事略史、沖野博士伝」は 86 才の高齢に於ける著作でありまして、我々は先生の不撓不屈の精神力に対して深甚なる敬意を表するものであります。

土木学会関係については昭和 4 年常議員理事、同 8 年第 21 代会長となり、その他数多くの調査および研究会の委員長の重責につき、本学会の事業推進と発展のために献身されたばかりでなく、その編纂にかゝる「明治以後本邦土木と外人」には多大なる貢献を致される等その御努力に対しては会員一同感謝に堪えないところであります。上記の如く土木工学および土木事業に対し功績とくに顕著なるの故を以て、昭和 21 年土木学会の名誉員に推挙されましたことは誠に当然のことです。更に御退官後は利根川治水協会の副会長に推されて、利根川治水の促進に努め、又河川協会、港湾協会および道路改良会等の各特別委員又は顧問として内務省の建設事業に側面から協力されましたが、終戦後は復興建設技術協会中国支部長および三原市役所顧問等として御活躍になり、我国建設技術界のために遺された御功績は大なるものがあるといわねばなりません。先生は資性温厚篤実から活潑闊達、しかも気品ある風格を備え、しかも敵に失することなく、手をとる如く淳々として後輩を指導されたのであります。御教示に預つたものをして永くその徳に浴せしむるといふ人徳の持主でありました。晩年先生は旧内務省の技術関係者の集りである旧交会の会長として、年次大会および毎月の例会には常に出席されましたので、私共は親しくその温容に接することができたのであります。先生は齡米寿に達するに拘らず、矍鑠壯者を凌ぎ、常に卓絶せる識見と豊富なる経験を談笑の間に後輩に口伝されている様子は正に旧交会の柱石と云ふ感を深くしたのであります。本年の陽春の候には旧交会としても先生の米寿の祝賀を催さんと計画しておりましたが、今や忽然としてその温容を見ず、親しくその声談に接することができなくなりましたことは私共にとつて限りなき悲しみであると共に、邦家のために痛恨にたえないところであります。ここに永遠に私共の師表として鑽仰される先覚者が在天の靈に対して心から御冥福を御祈りする次第であります。

逝去に当り特旨をもつて勲 2 等に徐せられ、銀杯 1 個を賜りました。（編集部註）

【正員 三信建設工業 K 取締役会長 工博 富永正義・記】



“土木関係者の銅像”執筆に当り編集部あて届いた年賀状で最後まで原稿の正確を心配されていた。